

シマフクロウ
撮影：環境省釧路自然環境事務所



フォレスト
サポーターズ



美しい森林づくり推進国民運動

100年後にシマフクロウが棲める 生物多様性の森林づくり

——財団法人日本野鳥の会



シマフクロウの森とグリーン・ホリデーについて語る、サンクチュアリ室の富岡辰先室長(右)と普及室普及教育グループの岡本裕子チーフ(左)



2011・国際森林年

ハンノキの森。「シマフクロウの森を育てよう!プロジェクト」は、100年後にシマフクロウが棲める森の復元を目指す

森をささえよう

森と暮らそう

財団法人日本野鳥の会は、平成22年7月にフォレスト・サポーターズに登録しました。森林は野鳥の重要な生息地になっているとともに、バードウォッチャー達の活動フィールドにもなっています。

会では、野鳥に象徴される生きものと人が共生する森林を守っていくための活動に取り組んでいます。

日本野鳥の会では、20年ほど前から、北海道東部のシマフクロウやタンチョウが生息する地域を中心に土地を購入し、野鳥保護区を設置する活動に取り組んできました。シマフクロウは、日本とロシアの一部にのみ生息する世界最大のフクロウ類ですが、日本では北海道東部に約130羽が確認されるのみで、絶滅が危惧されています。樹齢100年以上の落葉広葉樹の大木の洞に営巣し、川の魚を捕って暮らす彼らは、森林が切り開かれるとともにその生息環境を失い、数を減らしていきました。

現在、シマフクロウやタンチョウのための野鳥保護区は約2670ヘクタールあ

り、区域内は彼らの生息に適した森林や湿地ですが、その中には伐採されたまま放置されていたり、放牧した跡地が含まれます。このような土地にはササが生い茂り、昆虫やそれを餌とする小鳥も少なく、シマフクロウが生息できなくなる森林にはほど遠い状態にあります。そこで、会では100年後の未来にシマフクロウが棲める森を目指して植樹を行ない、生物多様性に富んだ森林をつくることとともに、植樹した木が育つ過程で二酸化炭素吸収にも役立っているプロジェクトを開始しました。これが「シマフクロウの森を育てよう!プロジェクト」です。

平成21年から、毎年1ヘ

フォレスト・サポーターズ

4つのアクション
活動紹介



「グリーン・ホリデー」でヤナギの挿し木をするボランティア達



間伐した材を運ぶ



エゾシカの食害から苗木を守るため金属製の網を設置



スギ間伐材で作った巣箱(左)、餌台(中)、カラマツ間伐材で作った果物フィーダー(右)



復元された森を見られる未来を信じて、親子で植樹に参加した子どもたち

今日からやろう! 森のための

4つのアクション



森にふれよう



木をつかおう

シマフクロウの森における植樹や管理の活動は、平成21年からスタートさせた「グリーン・ホリデー」というボランティア・ツアーとも連動しています。この活動は、主に大学生や20代、30代の若い人達に、休日を使って自然体験をしてもらうことにより、自然を守る活動に参加するきっかけにしておうという趣旨で始められました。各

クータルを20区画に分け、1区画25万円の協賛を募り、1区画100本として合計2000本の苗木を植えてきました。北海道では成長の早いカラマツなどの植林が多いのですが、会では区内にもともと自生していたハルニレ、ミズナラ、ヤチタモ、ハンノキなどの落葉広葉樹を植林しています。また、植樹後はエゾシカの食害から守るための柵を設置したり、除間伐を行なうなど、目指す森林が復元されるようにレンジャーを配置して管理し、その様子をホームページなどで協賛者や一般の人に対し公開しています。

地の野鳥保護区で行なわれていますが、シマフクロウの森でも植樹をはじめ間伐、シカ柵の設置、間伐した材の新割りなどをボランティアの若者が担っています。親子で参加できるプログラムもあり、野鳥が暮らす生物多様性に富んだ森林や、自然に対する理解が、これらの活動を通して急速に広がってきています。

また、会では、20年以上前から、スギやカラマツの間伐材で作った巣箱や餌台などのオリジナル商品を販売し、ロングセラーとなっています。

今年も国際森林年です。日本では古くから森林と人が共生してきました。水源をかん養し、多様な生きものが棲む豊かな森、そのシンボルが野鳥です。野鳥をきっかけにして、森林が人間にとって不可欠なものであることに気づいてもらうことが会の役割だと思っています。昨年の国際生物多様性年と国際森林年を別々に考えるのではなく、昨年実施した活動をつないでいきたいと思っています。